

## ★原稿を投稿しましょう!!

この会は地形・地質を中心に話題提供、現地見学を目的につくられましたが、自然環境という意味では地質も生物も気象もシームレスで大きな関わりを持っています。会員の皆さんが、地質に限らずご自分の関心のある話題や、見学記、疑問などが投稿され、それに対するご意見ご感想が交換できればいいと感じています。個人的には「雑学」こそが一番重要なことだと思います。まだ、小さな会ですので、書きたいことを書いていただけたら幸いです。原稿はいつでも受け付けていますので奮って投稿をお願いします。

(村松)

## 大地をつくるもの (3) 名古屋の地形 1

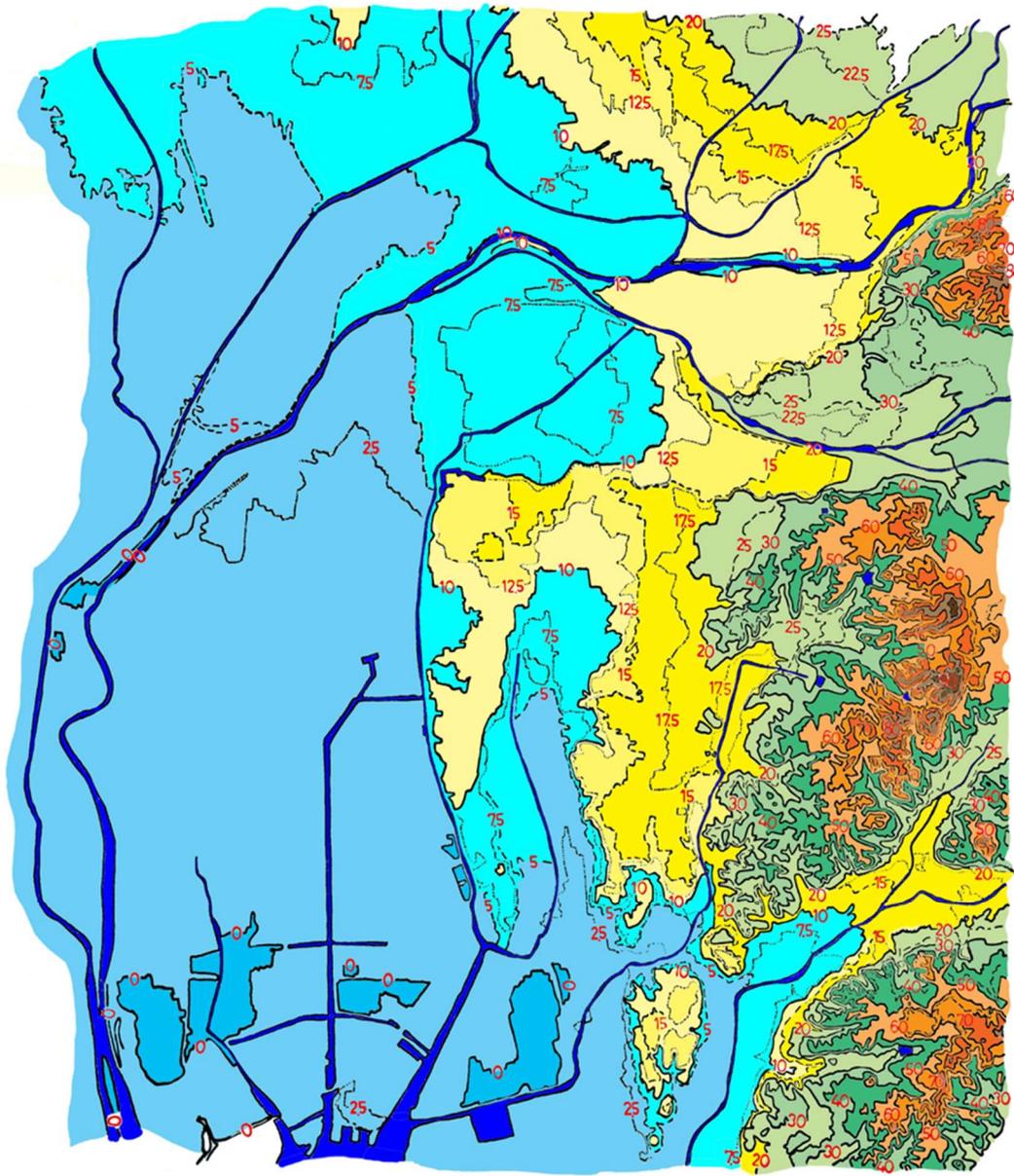
なごやの大地の地形は、大雑把にみると堀川より西側の沖積低地、そこから東側の山崎川までが台地、さらにその東側は丘陵からなっています。一番目立つ地形は堀川から山崎川までの間の熱田台地と呼ばれるものでしょう。第一図はかつて唯一1mごとの等高線が表示されていた土地利用条件図からトレースして作成した等高線図です。原図は畳2枚ほどもあり、何回もトレースして縮小、加色したものです。

名古屋城から熱田神宮のあたりまでの堀川を西縁とする熱田台地は、熱田層と呼ばれる地層からできています。一部は笠寺周辺に分布しています。熱田層下部は海で堆積した地層ですが、現在、地表で見られる熱田層は中位段丘と呼ばれる礫層が多いです。残念ながら海の貝化石が出る下部層は地表では見られません。標高がほぼ10mの台地でその形から古くから「象の鼻」の様だといわれています。この台地の北縁には尼ヶ坂や坊ヶ坂をはじめ現在も坂(斜面)が残っています。かつての名鉄瀬戸線は名古屋城の堀を通してこの坂の下を通過していました。現在の県図書館の南のところに大津橋という駅があり、私も通勤で使ったことがあります。台地上には鎌倉時代のころから比較的大きな集落があったようですが、室町時代に現在の名古屋城二の丸付近に今川氏親(今川義元の父)により那古屋城がつけられました。

なお、坂道は熱田台地を削る大曾根層の北縁にも見られ清水坂など、名古屋の名水と呼ばれる地下水の湧出が有名です。湧水に深くかかわる大曾根層については次号で紹介します。

山崎川以東の丘陵地は主に東海層群と呼ばれる砂礫中心の地層や、その上に載る八事・唐山層からできています。これらの地層は猪高面、八事面、覚王山面などと呼ばれる、緩やかに南西～西方に傾く平坦面をつくっています。近年はビルや樹木の成長でわかりにくくなってきたのは残念ですね。

熱田台地の周辺は低地で名城公園のあたりも湿地帯だったようです。台地の西～南にかけては庄内川をはじめ木曾三川の運ぶ大量の土砂によって、遠浅で干潟が広がっていましたが、江戸時代以降盛んに干拓が進みました。それにつれて台地の南端にあった熱田の港(現在の南区内田橋付近)を廃して新たに沖側に名古屋港が1907年(明治40年)にできました。東海道線開通に伴って名古屋駅が台地の西方の低地(現在の笹島付近)に造られました。古い写真を見ると駅前には雨水がたまりやすかったようです。当時の鉄道では台地の上へ通すのが困難だったのかもしれない。現在でも中央線は熱田台地が狭くなった金山の切割を通り抜けて、大曾根層が分布する谷間のようなところを通過しています。名古屋駅が低地につくられたことは、市街が西方の沖積低地に向かって拡大していくきっかけになりました。



第一図 名古屋の等高線図

(村松原図)



第二図 名古屋の地形断面 (イメージ図)

(村松原図)



戦艦「土佐」に似ていることから軍艦島という愛称があります。長崎港から 18.5km の距離を船（ツアー：数社あります：4000 円くらいかかります）で渡りますが、波が高いと接岸できませんので、行けば必ず上陸できるというわけではありません（私が行ったときは幸い上陸できました）。もともとの島は中心部にある小山だけで（下図参照）、施設のある地域はすべて埋め



端島 (朝日新聞デジタルより)

立てによるものです。江戸時代から海底炭田として採掘されましたが、明治になって旧肥前藩主鍋島氏から三菱財閥が買取した後、本格的に採掘が開始されました。端島は隔離された世界でしたが、日本初の鉄筋アパート(7階建て)の建設(1916年)、テレビ所有率の高さなど、島民は経済的にはとても豊かだったそうです。1974年、閉山とともに無人島化し上陸は禁止されましたが、2009年から再び観光用に渡ることができるようになりました。野母崎半島からは沖合に浮かぶ軍艦島がよく見られます。2015年には世界文化遺産に登録されました。

日本の炭田の多くは地下で採掘されており、粉じん爆発などの危険のため部外者は入れませんでした。日本の夾炭層(石炭を含む地層)は古第三紀(およそ6,600万年前~2,300万年前まで)層で、海外の炭層に比べ新しいため炭化度が進んでおらず良質とは言えないものも多いのですが、落盤などで多くの犠牲者を伴いながらも基幹産業として日本の経済を支えてきました。名古屋周辺のもの新第三紀の亜炭ですので、とても良質で有名であった端島や、隣接する高島、伊王島などの炭田群は学生のころから魅力がありました。すでにすべて閉山していますが、見学した伊王島や筑豊炭田のボタ山などは次回に紹介いたします。

※日本の鉱山は地下での採掘が多いためか、部外者の入坑は厳しく制限されてきました。死と隣り合わせの鉱山労働者たちは迷信と分かっていますが、特に女性の入坑は山の神(女性?)が嫌うとか?で専門家でも嫌がられたようです。現在は観光施設として見学できる鉱山跡も多いようです。私が入ったことのあるのは大谷鉱山という東北地方にあった金鉱山で、一人で突然訪ねたにもかかわらず、親切に坑道を案内していただきました。発破をかけた直後は砂塵が坑道を埋め尽くし方向が分からなくなるなどの貴重な体験ができました。金鉱山は石英という丈夫な鉱物に伴うので比較的安全だったのかと思います。足尾銅山は紹介状があってもダメでした。公害問題が叫ばれてからはとても厳しかったです。ちなみに金属鉱山(跡)付近の湧水は、いくら見た目がきれいでも飲まない方がいいですよ。あちこちの鉱山跡には閉山した今も、湧水に含まれる有害物質除去のための貯水設備が活躍しています。人間の生活空間(地表)に無かった物質(鉱物など)は有害のものが多くですね。